

第1問 世界史上の法

A

中国の統治理論の源泉と言える儒家・法家の思想については、P. 108 の一覧表や流れ図が重要。清末からの中国近代化の模索については、P. 248 に概観を用意した。領事裁判権の承認をはじめ、様々な形で主権が脅かされていく様子を整理したい。

問1 正解② (中国の法制) 1

李斯については秦との関わりだけでなく、荀子や商鞅からの思想的系譜にも注意したい(P. 108 参照)。荀子は儒家に属しながら性悪説をとって「礼」を重視し、法治主義への道をひらいた。一方、商鞅は明確に「法」による信賞必罰をとなえ、秦を強国におしあげた。これらを受け継いだ李斯が始皇帝に仕えるのである。法治主義徹底のため焚書・坑儒を進言したのも、李斯と伝えられる(P. 109 の[2])。ただし、秦に続く漢では、武帝時代に儒学の官学化が実施される(P. 110 の[1])ので注意。律令格式についてはP. 117 の[5]に注がある。律と令くらいはおさえておきたい。

問2 正解④ (中華民国の歴史) 2

中華民国の歴史については、前半を孫文・袁世凱にからめて確認し、後半を国民党・共産党にからめて眺めるのが、有力な方法である。前半はP. 251 の[5]、後半はP. 274 の[1]を参考にしてほしい。

①五・四運動についてはP. 274 の[2]。思想的背景に文学革命があり、直接的契機として、日本を含む列強の侵略的行為がある。山東半島に利権を持っていたのはドイツ(P. 249 の[4])。日本は、第一次世界大戦中の二十一カ条要求でこの権益の継承も求め、強要した(P. 261 の「諸国の参戦理由」参照)。

②北京の学生たちの抗議デモから始まった。ただし、運動そのものは上海にも拡大していく。

③第一次世界大戦に乗じてアジアでの権益を拡大させた日本に対して、欧米諸国の警戒感も増大し、ワシントン体制構築に動き出す。一方で、大戦に参戦し国権回復をねらっていた中国は期待を裏切られたため、五・四運動など「下からの」つきあがりもあり、ヴェルサイユ条約の調印を拒否した。P. 267 の[3]と[5]参照。

- ④ワシントン会議で調印された条約のなかで、四カ国条約と九カ国条約は特に重要。
後者では中国の領土保全が確認され、日本・中国とも調印している。P. 267 の⁵
参照。

問 3 正解② (第二次世界大戦中の出来事) ³

太平洋戦争で日本軍が最初に攻撃したのは、ハワイとマレー半島である。P. 281
の³参照。

- ①第一次世界大戦とロシア革命にともなって東欧諸国が独立するが、フィンランド
の独立もこのとき。P. 266 の¹。北ヨーロッパの歴史は盲点になりやすいので、
この機会に P. 231 の¹も見てほしい。
- ③アジア=アフリカ会議(バンドン会議)は第三世界の台頭を象徴する動きで、P. 289
に記載がある。ネルー・周恩来の平和五原則からの流れも見ておこう。
- ④コミンテルンは、ソヴィエトに対する列国の干渉戦争の中で結成され(P. 265)、ロ
シア革命の影響を対外的に伝える役割も担った。また、反ファシズム戦線でも大
きな役割を果たした(P. 276 の³および P. 278)。

B

問 4 正解① (世界史上の法) 4

①ドラコンの成文法については、P. 80 の1参照。これはアテネ史の重要事項である。

なお、アテネ史とギリシア史を混同してはいけない。

②④権利の請願→権利の宣言→権利の章典と続く流れはイギリス憲政史の重要事項。

P. 205 で確認しておこう。また、P. 205 からさかのぼって、イギリスの議会形成過程について、P. 148 の2で整理してほしい。貴族・騎士・市民などの各身分が、議会の構成員として認められていく様子を整理しよう。

③自然法思想・社会契約説・啓蒙思想は相互に関係しているため、P. 206, 207 でできるだけ整理したい。

問 5 正解③ (イギリスのインド支配) 5

第一次世界大戦中、インド兵がイギリス軍として従軍したにも関わらず、イギリスのインドに対する態度は冷淡であった。インドの人々の失望に加え、ローラット法やアムリットサル事件も背景となって、ガンディーの非暴力の抵抗運動が開始される。P. 262 の1や P. 273 の5を参照。インドの独立運動とイギリス側のヒन्दゥー・イスラーム分離支配の関係も重要。これも P. 273 の5で、ベンガル分割令からパキスタン独立までの流れを追っておきたい。なお、国民会議は当初親英的な態度もとっていたが、しだいに先鋭化し、ラホール大会の「プールナ=スワラージ」決議に至ったことを確認しよう。

問 6 正解③ (ベンガル地方の位置と歴史) 6

インドにおけるイギリスの支配地域の拡大については、P. 244 の地図・年表を見ておきたい。ボンベイ・マドラス・カルカッタの拠点獲得→ブラッシーの戦いに勝利してベンガル支配→マイソール戦争で南インド支配→マラーター戦争で中部インド支配→シク戦争でパンジャーブ支配くらいはおさえたい。ベンガルは現在の Bangladesh 付近と考えても良い(P. 273 の地図C)。

C

アメリカ独立から合衆国憲法制定，その直後の修正条項の追加などについては P. 216 の年表などを参照。アメリカの奴隷解放に関しては P. 236 の³で丁寧に解説しているので確認してほしい。欧米諸国の奴隷制全体を概観しておくのも有効で，P. 212 を使ってほしい。

問 7 正解① （世界史上の法や国家制度） 7

①人身保護法については P. 205 の年表参照。

②フランス革命の流れをオーソドックスにとらえる方法として，国民議会→立法議会→国民公会→総裁政府という時期区分がある。P. 218 の年表参照。貴族から始まった革命がしだいに激化し，主導権がフイヤン派→ジロンド派→ジャコバン派と推移することも，同時に確認できるだろう。国民議会時代にヴァレンヌ逃亡事件がおこって，国王夫妻の裏切りと革命防衛戦争の必要性が認識され，オーストリアに宣戦するのが立法議会時代のジロンド派内閣である。しかし，戦局好転のためには，王党派が多く戦意の乏しい正規軍ではなく義勇軍の登場を待たねばならず，8月10日事件で王権停止が決定される。1793年から翌年のテルミドールのクーデタまでは革命激化の頂点で，ルイ16世と王妃の処刑，ジャコバン派による恐怖政治が確認できる。なお，革命期の3憲法の比較も，この機会にしてみたい(P. 219 の⁴)。

③イギリスの責任内閣制は18世紀に成立。「ドイツ系」ハノーヴァー朝の成立とともに P. 205 の年表で確認したい。保守主義をキーワードとする19世紀前半のウィーン体制下において，国内の自由主義的改革が進んだのはイギリスの特質である。チャーティスト運動を含めて，この時期のイギリス自由主義のめざすものの1つが，選挙権の拡大であった。P. 226 の²を参照。チャーティスト運動の背景には，早期に工業化したイギリスにおけるブルジョワジーと労働者階級の台頭と対立があり，19世紀後半の社会主義思想の拡大を準備したともいえる(P. 215 の³)。

④ソ連の指導者は共産党の書記長である。なかでもスターリンは，対立する人々の大粛清を繰り返した(P. 265)。その象徴がスターリン憲法である。彼の死後，スターリン批判を行ったフルシチョフは，大きな注目を浴びた(P. 310 参照)。歴代

書記長の政治については P. 310 の¹で整理したい。ソ連が大統領制になるのは、末期のゴルバチョフ時代。

問 8 正解① (世界史上の奴隷制) ⁸

- a 古代ギリシアの奴隷は，近代奴隷制と違って家内奴隷であり，一般市民が日常生活や民主政治を営む余裕をつくりだす存在であった。P. 80 に詳しい。
- b アメリカ南部の綿花栽培用の奴隷については P. 235 を参照。奴隷制が南北戦争の一要因となること，リンカンの奴隷解放宣言の「意図」などもあわせて理解したい。

問 9 正解② (19 世紀のアメリカ大陸での出来事) ⁹

- ①アメリカ史においては，まず独立過程の整理が必須(P. 216)。ほかにも，領土の拡大過程の整理(P. 234)や，南北戦争→経済的発展とフロンティアの消滅→帝国主義的進出の開始という流れの確認などが必要。南北戦争中の事象として奴隷解放宣言だけでなくホームステッド法もおさえておきたい。領土の拡大と開拓の終了は別物であり，南北戦争当時，西部には大きな未開拓地が存在した。リンカンは西部の開拓農民の支持を得たかったのである(選挙権ではなく土地を与える制度であった)。当時の北部・南部・西部の関係については P. 236 の¹で確認しよう。その後の経済発展では，大陸横断鉄道や A F L の成立，帝国主義時代ではアメリカ=スペイン戦争・門戸開放通牒・棍棒外交などがキーワードとなる。このあたりは P. 234 だけでなく，P. 259 の²も参照。
- ②P. 234 の地図^Aで確認。1783 年のパリ条約で独立を正式に認められたときの領土は，ミシシッピ川以東のルイジアナまで。その後，1890 年にフロンティアが消滅するまで，領土拡大が進む。ハワイ併合も 1898 年のため，現在のアメリカ合衆国の領土は 19 世紀中に形成されたことになる。
- ③帝国主義的政策をとりはじめたアメリカは，カリブ海から南米へも影響力の拡大を企図した。メキシコのディアス政権によるアメリカ資本の導入，パン=アメリカ会議の主催，アメリカ=スペイン戦争，パナマ運河の建設と支配など，アメリカの対外政策について P. 224 や P. 259 で整理したい。
- ④カナダはイギリスの五大自治植民地の 1 つである(P. 225 の¹)¹が，イギリス連邦

成立は世界恐慌下の出来事。P. 276 の³に説明がある。

第2問 世界史上の都市と経済

A

中国の主要都市(特に都)の位置や江南開発との関係については、P. 154 の³や後見返しの「中国史のまとめ」で学習できる。中国の都は黄河沿いから運河沿いに移動していくが、開封はその過渡期の都と考えられるだろう。宋代の特徴は、文治主義・北方民族との対立と財政難などにあるが、膨大な数の官僚と軍人や、和平のための銀・絹の抛出を支えたのは、都市経済の発展であった。P. 154 を見て、経済状況を総合的にイメージしたい。靖康の変に伴う遷都などについては、P. 152 の^Bの地図を参照。

問1 正解④ (宋の都) ¹⁰

後見返しの「中国史のまとめ」で確認したい。長安と洛陽は何度か都となるが、前者が政治的首都、洛陽が経済的首都という雰囲気、ペアで運用されることもあった。咸陽は、唐長安城から少し離れた場所に遺跡が見られる。建康は時代によって建業・南京とも称され、早くから江南開発の拠点であった(P. 154 の³)。

問2 正解② (宋代における商業や交易) ¹¹

- ①朱印船貿易は日本史でも基本的な事項であるが、東アジア・東南アジアを結ぶ海域世界で大きな役割を果たしていた。前期倭寇→明の朝貢交易圏とマラッカ王国・琉球王国・勘合貿易の繁栄→後期倭寇→朱印船貿易という流れや、関係する各地の状況を把握するためには P. 168, 169 のテーマ史が最適である。
- ②北方・西方を異民族におさえられた宋代中国においては、海上交易ルートが極めて重要であった。P. 154 の地図^Aに市舶司の位置が示されている。中国からはジャンク船で陶磁器が輸出されていた。P. 35 や P. 158 で海上交易の全体像も見ておきたい。
- ③唐・宋・元の紙幣の流通は頻出である。後見返しに整理してあるので確認しておこう。布銭は春秋戦国時代に流通していた(P. 107 参照)。
- ④草子や鎮は交易場や小都市を示す用語で、P. 154 のチェック参照。同業者組合は行・作と称された。こちらも確認しておこう。

問3 正解② (中国の文化) 12

中国では学問が国学化されたり，国家プロジェクトと結びついたりもするので，王朝ごとの文化の特質を含めておさえておきたい。

- a 欧陽脩は司馬光とともに，宋代に歴史書を編纂したことで知られる。この頃成立する歴史書では，北方民族による圧迫や宋学の発達を背景として，大義名分論の反映が見られる。P. 155 の4を中心に確認したい。
- b まず巻末の「中国史のまとめ」の1で，唐代の『五経正義』で五経解釈の統一→宋学の大成と四書の重視→元代には士大夫の冷遇→明代の朱子学の官学化と陽明学の成立→清初の考証学の成立という儒学史を追いかけてたい。ポイントとなるのは，政治的実用性の程度である。P. 173 の2を見ると，明末清初の顧炎武のところで「経世致用の学を重んじ」とあるが，清の規制をおそれてしだいに文献研究に偏りがちとなった。このような考証学に対して，経世致用への回帰をとなえたのが康有為らの公羊学である。
- c P. 173 の2参照。明代には永楽帝の名による編纂事業が，清代には康熙・雍正・乾隆帝による編纂事業が有名。明代の編纂書籍は朱子学との関係を思わせる。

B

問 4 正解② (世界史上の都市) 13

- ①アレクサンドロスの帝国各地に数多く建設されたアレクサンドリアは P. 82 の地図[A]で確認できる。この帝国の範囲がヘレニズム世界に該当するので重要。有名なのはエジプトのアレクサンドリアで、ムセイオンを含めた繁栄の様子については P. 83。ここを中心に発展したヘレニズム文化の内容 (P. 84 の[2]) とともに見ておこう。
- ②ヨーロッパの海外進出にともなって多くの植民都市が生まれる。まずは、P. 210 の[1]や P. 211 の地図[A]を使って、建設順や位置を整理したい。ニューオーリンズは P. 216 の地図[A]に記載されており、フランスが建設した。オーリンズとはオルレアンのこと。
- ③トルコの近代化を成しとげたムスタファ=ケマルについては、P. 272 の[4]を参照。オスマン帝国の統治システムからの脱却、第一次世界大戦の敗戦の危機からの脱出、憲法整備、女性参政権の実施など、トルコ史の大転換点をつくった。一連の改革のなかで、首都はアンカラとなる。
- ④ベルベル系イスラーム王朝のムラービト・ムワッヒド朝は必須事項。P. 34, 36 の全体地図で、領域が二大陸にまたがっている様子も確認したい。

問 5 正解④ (バルカン半島の歴史) 14

旧ユーゴスラヴィア地域はカトリックとギリシア正教の境界付近に位置するうえ、オスマン帝国時代にはムスリムも増加し、現在に至るまで紛争の多発する地域となった。現代の状況については P. 293 参照。P. 140 の[1]・[2]で、東欧の各民族・各国の宗教分布が確認できる。

二度のバルカン戦争は動きが複雑。P. 260 参照。パン=スラヴ主義の中心はロシアであり、セルビア側の支援国になる。二度目のバルカン戦争では、バルカン同盟内部の対立からブルガリアが敗戦国となり、スラヴ系国家でありながら独逸に接近して、第一次世界大戦を準備する。

問 6 正解③ (交易の歴史) 15

- ①16 世紀が元代ではなく明代なのは基本事項だが、この機会に P. 45 の年表を見てみよう。ゴア・マラッカを手に入れたポルトガルは明や日本と交易する。この頃世界中には日本銀とメキシコ銀が出回っており、絹・生糸・陶磁器・鉄砲などの交易に利用された。P. 187 のテーマ「銀がつなぐ世界史」も参照してほしい。
- ②ドイツ関税同盟については P. 229 の地図 **C** 参照。ドイツの統一過程では大ドイツ主義と小ドイツ主義を意識する必要がある。関税同盟自体がすでにプロイセン中心の組織であり、フランクフルト国民議会で小ドイツ主義の勝利が確実となった。P. 228 の **1** を見て、1867 年の北ドイツ連邦の成立で、「統一ドイツ」から完全にはみ出したオーストリアが、二重帝国を形成することも確認しよう。
- ③アメリカの帝国主義的進出については P. 259 の **2** および P. 249 の「列強が獲得した租借地と主な鉄道」で確認したい。
- ④ネルチンスク条約・キャフタ条約など露清の国境や領土をめぐる諸条約は要整理。ロシア側から整理したのが P. 204 の地図 **A**，中国側から整理したのが P. 250 の地図 **A**。初期の露清間条約は国境や通商に関する規定だが、しだいに、中国の朝貢・冊封体制の根幹を揺るがす内容になっていく。

C

問 7 正解③ (20 世紀の広域経済機構・地域協力機構) 16

地理的な問題とはいえ，この程度の出題は覚悟したい。①③④は P. 274 の 1。④のカンボジアが A S E A N に加盟するのは内戦終結後のことである (P. 298 の地図 A 参照)。②に関して，東西冷戦の初期の構図を P. 286 の「この時期の概観」で見よう。東側の組織は「今は無き」ものとなり，西側の組織はずいぶん様変わりしている。

問 8 正解③ (リューベックの位置と歴史) 17

リューベックはハンザ同盟都市である。P. 144 の地図 A で確認。在外商館も多いので注意。同都市は自由都市 (帝国都市) としても登場する。中世の「都市の自由」を現代人がイメージするのは難しいが，P. 144 の 3 も見てほしい。

問 9 正解④ (首都の歴史) 18

- ①ウィーン包囲はオスマン帝国最盛期の事項。P. 178 の年表で確認。この頃，ヨーロッパは宗教改革の途中で，ウィーン包囲により政治的影響を受けた。P. 195「宗教改革時の国際関係」を読み，アウクスブルクの和議に至る経過をおさえておきたい。
- ②戦後史を象徴する重要な写真が図表には数多く掲載されているので確認しておきたい。例えば，P. 291 のマルタ会談の写真が該当する。ほかにも，P. 296 の南北首脳会談，P. 302 のパレスチナ暫定自治協定など，いろいろ挙げることができる。
- ③メキシコシティは，スペイン人がアステカ王国の都テノチティランを破壊して，その上に建設したもの。P. 185 にはテノチティランについてのコラムがあるので読んでおこう。なお，図表には，世界遺産の写真も数多く掲載されている。P. 184 のインカの都マチュ=ピチュの天空遺跡はなかなかのインパクトである。
- ④日本で開催された大阪万博，近年中国で開催された北京万博など，いつの時代も万博には国家の威信や名誉がかかっている。ヴィクトリア女王時代のイギリスで開催されたロンドン万博も同様。P. 240 には万博のコラムがあるので読んでおこう。

第3問 世界史上の宗教

A

問1 正解① (ローマ教皇) 19

ローマ教皇に関することと、教皇権の盛衰については P. 138 の年表を参照。

- ①正しい。
- ②レオ3世はカール大帝にローマ帝国の帝冠を授けた。戴冠の意義については P. 135 の写真解説などを参照。
- ③ウルバヌス2世は最初の十字軍を提唱。十字軍の経過については P. 142 に詳しい。
また、広い意味の十字軍(西欧世界の拡大)については P. 143 の3。
- ④レオ10世は P. 194 で確認。宗教改革の契機となる贖宥状の販売で有名な教皇である。彼は、ローマのルネサンスのパトロンでもあった。P. 193 でサン=ピエトロ大聖堂の外観や内部の様子もあわせて見ておきたい。

問2 正解② (古代ギリシア・ローマ時代の宗教) 20

- a 古代ギリシアの神々は人間的な姿で彫刻にきざまれ、喜怒哀楽をあらわにして神話にえがかれた。P. 79 の4を参照してほしい。P. 85 にはギリシア彫刻(古典様式)の傑作とされるゼウス像や、ヘレニズム様式のラオコーン(神話が題材)が掲載されている。古代ギリシアの宗教・文化スタイルは、中世ヨーロッパでは姿を潜めるが、ルネサンス時代に再び模倣される。P. 190 の「春」「ヴィーナスの誕生」などが好例。
- b 古代イランの宗教としてはゾロアスター教に目が行きやすい。しかし、ササン朝初期に生まれたマニ教も、ゾロアスター教とともに東西に伝播した(P. 77 の地図D)。ゾロアスター教の「最後の審判」の思想などは後にユダヤ教やキリスト教にも影響していく(P. 77 の3)。マニ教はゾロアスター教にキリスト教などを融合させたものだから、成立時期やローマへの伝播時期は推測可能。ローマ帝国では、教父と慕われたアウグスティヌスが当初マニ教に傾倒したと伝えられ、その浸透度がうかがわれる(P. 95 参照)。

問3 正解③ (ササン朝の歴史) 21

アケメネス朝・パルティア・ササン朝を比較することは必須なので、P. 77 の[2]を使いたい。また、共通して、東西交易や宗教の伝播などで大きな役割を果たすため、同時代の隣接国家の状態の確認(P. 76 [1])や、東西交渉の内容の確認(P. 77 コラム)も重要である。

①ササン朝が倒したのはパルティアである。

②ヘレニズム世界の東端はだいたいインダス川である(アレクサンドロスの帝国)。

パルティアの時代にイランはヘレニズムから伝統的状态に回帰していくが、イラン文明の東端もインダス川くらいと考えて良い。P. 76 の地図参照。

③ニハーヴァンドの戦いは、イランがイスラームの支配下に入る転換点。このような場合は、全体地図で広範囲の状況を確認したい。P. 26 参照。なお、イラン系民族はイスラーム支配下でも、官僚や文学者としてその存在感を維持する(P. 128 参照)。

④前述のように、東西の隣接国家との横関係は要注意。シャープール1世とローマ帝国・クシャナ朝の関係を P. 76 の[1]で確認。ホスロー1世とユスティニアヌス帝がほぼ同時代の有名君主であることもおさえておきたい。

B

唐代中国，特に都の長安の国際性は，居住する民族の多様さや，林立する宗教建築物によって証明される。P. 29 でソグド人やムスリムの流入・来訪，P. 119 で長安の街並みと宗教の混在，P. 118 で三夷教の存在や渡印僧の活躍を確認できる。

問 4 正解⑤ (唐代におこった出来事) 22

- a タラス河畔の戦いはアッバース朝成立直後の事象で，東西の大帝国が衝突した (P. 29 参照)。イスラーム世界はこの後，アッバース朝のもとでイスラーム帝国化していく (P. 123)。一方，唐ではこの後，安史の乱がおこり，節度使が台頭していく (節度使についても P. 29)。なお，タラス河畔の戦いは製紙法の伝播に関わっている (P. 112 のコラムも見ておこう)。
- b キエフ公国のポイントは，9～10 世紀のノルマン人の移動の中の一事件であること (P. 136 参照)，ロシア地域の正教化の源になったこと (P. 141 参照) である。キエフが正教化した頃，ビザンツ帝国も最盛期 (中興期) をむかえていた (P. 32 と P. 139)。
- c P. 122 の 2 参照。ムハンマドがアッラーの啓示を受けてから正統カリフ時代の終わりまでで約 50 年。その後 100 年間はウマイヤ朝時代。ニハーヴァンドの戦いやコーランの成立は前者の期間，シーア派の形成やトゥール・ポワティエ間の戦いなどはウマイヤ朝時代。

問 5 正解② (ネストリウス派キリスト教) 23

中国における伝来宗教の漢字表記は整理しよう (P. 118 の 1)。キリスト教の系譜は P. 95 に記載があるので，まずは，三位一体説が正統教義となる過程を確認。

アナーニ事件や教皇のバビロン捕囚 (P. 146 の 3) などにより，14 世紀の教皇権の衰退，教会に対する不信感は増大していった。教会大分裂の解決や教会を批判するフス (P. 146 の 4) への対処が必要となり，コンスタンツ公会議が開かれる。教会不信はフス戦争となって尾を引き，16 世紀の宗教改革の前ぶれともなった (P. 194)。トリエント公会議は対抗宗教改革の基礎となった (P. 194 の 1)。

問 6 正解③ (ユーラシア大陸内陸部に存在した国) 24

内陸アジア史は盲点になりやすい。P. 156 の²で個別の知識を並べ替えたり，関連づけたりする訓練をしたい。トルコ系民族の移動とイスラームの受容，トルキスタンの成立，モンゴル帝国の支配，ウズベク人の国家や清の進出，などがポイントとなるだろう。

- ①バクトリアについては P. 82 の地図^C参照。アレクサンドロスの帝国分裂後のギリシア系国家である。ここにギリシア人が居たことは，クシャーナ朝時代のガンダーラ様式(仏像彫刻)につながっていく。
- ②カラハン朝は P. 35 と P. 126 の地図^B，P. 127 を参照。イスラーム化したトルコ人の西遷の起点といえる。
- ③ブワイフ朝は，10 世紀のイスラーム世界がシーア派の世紀である象徴。P. 126 の^A～^Dで，時期ごとのイスラーム世界のキーワードをおさえたい。インドに侵入を繰り返すのはガズナ朝やゴール朝(P. 35, 37)。
- ④P. 49, 51 でブハラ・ヒヴァ・コーカンドの 3 ハン国の位置を確認。ロシアの南下政策は中央アジアにも矛先が向いていた。ここがロシアのものになったのは 19 世紀半ば以降で，P. 233 の³参照。国内的にはナロードニキ運動の始まる頃，中国方面では沿海州を得た頃，極東ではロシア＝トルコ戦争の頃，となる。

C

問7 正解② (イスラーム) 25

- a 正しい。なお、イスラームにおける『コーラン』やムハンマドは、旧約聖書・新約聖書やモーセ・イエスと密接な関係に位置づけられるので、この機会に確認しておこう (P. 124)。
- b これは勘違いしやすい。メディナに移住したのがヒジュラ。逃げたのではなく、ここで住民とともにウンマ(ムスリム共同体)をつくったのだから、極めて重要な行動だった (P. 122 参照)。

問8 正解① (パン=イスラーム主義) 26

列強の進出にともない、イスラーム世界では、諸制度の西欧化・近代化が行われる一方、パン=イスラーム主義とよばれる反帝国主義運動(の基礎)も生まれた。P. 242・243 を参照。パン=イスラーム主義はイラン・エジプトのほか、オスマン帝国のアブデュル=ハミト2世も利用した (P. 242 のコラム「日本まで来た！オスマン帝国の軍艦」参照)。

- ②イブン=ルシュドはイスラームの哲学者でアリストテレスの注釈で知られる (P. 128)。これが、12世紀ルネサンスを通じてスコラ学にも影響する (P. 128, P. 161 参照)。
- ③アラファトは、第1次中東戦争以降発生したパレスチナ難民の指導者で、精神的支柱でもあったパレスチナ解放機構(PLO)の議長。パレスチナ問題は戦後最大級の紛争であり、要整理。P. 302 で詳しく確認することができる。イスラエル建国の背景となるユダヤ人の迫害については、P. 277 のテーマで確認しておこう。
- ④シャー=ジャハーンはムガル帝国皇帝。アクバルとアウラングゼーブにはさまれて影が薄いが、タージ=マハル廟 (P. 181 コラム) が彼の名を歴史に残した。解説にある通り、これは宮殿ではなく廟(墓)で、イスラーム文化の影響を示している。

問9 正解④ (政治権力と宗教) 27

- ①P. 141 参照。ウラディミル1世はキエフ公国の君主で、ギリシア正教を受容した。
- ②P. 176 で確認。サファヴィー朝はオスマン帝国と対立しつつ、シーア派を軸とし

た国を引き締めていった。現代イランもシーア派が大きな支柱となっているが、その直接的起源といえよう。

③P. 90 の年表で確認。キリスト教を大迫害したディオクレティアヌスと公認したコンスタンティヌスの比較は重要。バーク教については P. 243 参照。イランの列強に対する抵抗運動には様々なパターンがあるので、タバコ=ボイコット運動や立憲革命との違いも見ておこう。

④インドにおけるアショーカ王・カニシカ王と仏教の関係は極めて重要。P. 98 の年表や人物コラムを参照。アショーカ王時代ではダルマによる統治やスリランカへの布教を確認。カニシカ王の頃になると、大乘仏教の成立やガンダーラ美術の発展など、仏教史に新しい側面があらわれる。

第4問 世界史上の君主や王朝

A

インド的な宗教や文化が東南アジアに古くから伝わり、同地域の思想や宇宙観の土台になったことは、P. 102 の²で知っておきたい。現代の東南アジアは上座仏教とイスラームが中心であるが、海洋交易にともない様々なモノやヒトが行き来した地域であるから、一面的な理解では不十分である。

問1 正解④ (世界史上の王国や王朝) 28

- ①P. 243 参照。ムハンマド=アリーはエジプトでオスマン帝国から独立的地位を築き、農業や軍隊の近代化を進めた。しかし、スエズ運河建設にともなう財政難などから、エジプトのイギリスへの従属も強まった。同じ頃、サウジアラビアに盛衰を繰り返したのがワッハーブ王国である(P. 242 の¹やP. 243 の用語解説参照)。
- ②アフガニスタンは、ロシアの南下政策に対抗するイギリス側の前線基地として保護国化された。P. 243 の右下で確認。
- ③東南アジアの王朝変遷は意外に複雑なので、P. 102 の下部年表を参照。ラタナコーシン朝は近代化政策を行って独立を守り(P. 246 のチェック参照)、現在に至るまで存続している。
- ④アメリカの勢力がハワイ・グアム・フィリピンに到達したのは1898年(P. 259 の²)。これは、列強が中国に租借地を獲得したのとほぼ同時(P. 249「列強が獲得した租借地と主な鉄道」)なので、帝国主義の歴史としては重要な時期である。なお、中国進出に一步遅れたアメリカが、門戸開放通牒を出す。

問2 正解④ (オケオの名称と位置) 29

高校世界史で東南アジア史が詳しく扱われるようになり、港市国家に対する注目度も増している。P. 103 の⁴で港市国家の構造が確認でき、P. 102 の下部年表の赤字で、具体的な港市国家がわかる。輸出される物資の生産を支える風土についてはP100を参考にしたい。また、港市である以上、常に東西交渉や海域世界の結節点として重要な役割を果たすことになる。各世紀の全体地図を順にめくりながら、変遷を見渡してみるのも良い。

扶南については P. 103 の写真解説(オケオ)と P. 17 で確認。東南アジアでも最初期の港市である。アチェは近代史的な事項で、ポルトガル・オランダが東南アジア島嶼部に進出してきた後、ムスリム(商人)が形成した王国(アチェ・バンテン・マタラム)の中心として繁栄した。P. 169 の地図 **D** と P. 45, 47, 49 の全体地図参照。

問 3 正解② (19 世紀の東南アジアにおける植民地経済) 30

ジャワはオランダ領でマレー半島はイギリス領。P. 246 の **B** の地図で確認できる基本事項。植民地の主要輸出品については、同ページの **2** を参照。現代のモノカルチャー経済の起源であるから、強制裁培制度の用語解説とともにしっかりおさえない。生産されたコーヒー・サトウキビなどの作物については、折込の「動物と植物に見る世界史①」も読んでおこう。

B

リューリク朝という呼称は、なじみが薄いかもしれない。ロシアでは、ノヴゴロド国の建国者の一族が、キエフ公国の建国者オレーグも含めて、16世紀末までのロシア諸公・諸大公を歴任したことになっている。P. 141 でその時期の年表を確認。間にモンゴル人による支配が挟まっていることに注意。ロシア史には王朝は2つしかない。

問4 正解④ (ロマノフ朝の皇帝) 31

歴代皇帝の治世については P. 204 と P. 232 参照。

アレクサンドル 1 世は P. 222 の①の写真に登場するとおり、ウィーン会議の参加者のひとり。ナポレオンと戦ったロシアは会議で大きな発言力を持ち、神聖同盟を提唱した。

ニコライ 1 世は次の皇帝で、ウィーン体制の保守的傾向に対抗する流れの中で、青年将校によるデカブリストの乱に直面する (P. 233)。また、クリミア戦争でも敗北して南下政策に失敗し、国家システムの矛盾や古さを露呈した。

さらに次の皇帝がアレクサンドル 2 世で、改革の必要を認識して、不徹底ながら農奴解放令を出した。クリミア戦争と農奴解放令は深く関わっている (P. 232) ため「正しい」と判断しそうだが注意したい。なお、解放令後も改革を求める動きは続き、ナロードニキ運動がおこる。

問5 正解① (ノルマン人) 32

P. 136 にすべて記載されている。ノルマン人のイングランド征服では、ノルマン＝コンクエストにだけ目が行きがちだが、クヌートを忘れてはいけない。また、ノルマン朝の成立は、その後の英仏の領土関係や君主-家臣関係を複雑にする。P. 147 の5で整理しよう。

問6 正解② (中世のギリシア正教) 33

①東西教会の分裂については、P. 138 と P. 139 の年表で確認できる。また、これ以降、ローマ教皇と世俗権力の関係、ビザンツ皇帝と聖権の関係の相違がよりはっきりしてくる。まずは P. 139 の表で整理したい。なお、ローマ教皇と神聖ローマ

帝国の関係は、両者の対立や諸皇帝のイタリア政策に伴うドイツ・イタリアの分裂傾向を生じさせる。P. 148 の¹や P. 149 を見てみよう。

②P. 140 の¹。セルビアとともにブルガリアもギリシア正教化していく。ビザンツ帝国による布教とキリル文字についても、P. 96 の用語解説で見ておきたい。

③①に解説したとおり整理したい。皇帝教皇主義という用語を使用するかどうかは別として、コンスタンティノーブル総主教とローマ教皇では権力の範囲やあり方は異なる。

④ステンドグラスが特徴的なのはゴシック様式。ビザンツ様式の内部装飾はモザイク画と正十字の平面形に特徴がある。整理は P. 150 の²で。各種様式の写真は P. 151 にある。モザイク画の好例としては、P. 139 のユスティニアヌスのものが有名。

C

問7 正解④ (マリア=テレジア) 34

オーストリアのマリア=テレジアはシュレジエンをめぐるプロイセンとの対立のなかで、フランスとの同盟を決意し(外交革命)、七年戦争にのぞんだ。イギリス・フランスに加えて、国際関係に大きな影響を持つようになったプロイセン・オーストリアの動きは P. 202 で整理しよう。また、外交革命と関連が深いオーストリア継承戦争・七年戦争については、P. 203 の[2]参照。

問8 正解③ (イギリスの選挙法改正) 35

選挙権は一般に「上から下へ」「男性から女性へ」拡大していく。これだけでも①がおかしいのはわかる。まずは P. 226 の[2]で地道に整理することをすすめる。また、女性の権利意識は、産業革命やフランス革命が背景となって高まっていく。P. 263 のテーマ「女性の権利の拡大」を見ておきたい。同ページのコラムに女性参政権獲得年代が記されている。第一次世界大戦前後に認められる国が多いが、イギリスにおける獲得は「世界初」ではないので注意。

問9 正解④ (19世紀のイギリスのアジア・アフリカ支配) 36

- ①中国における列強の進出状況は、地図を用いた整理が必須。P. 249 に詳しい。
- ②イギリス領インド帝国については、十分に歴史的考察をしたい。インド大反乱勃発→東インド会社解散(直接支配へ)→インド帝国成立(ヴィクトリア女王=インド皇帝)→ロシアに対抗してアフガニスタン保護国化という流れを確認しよう(P. 244 年表)。最終的なインド帝国の範囲は P. 244 の[B]で見て、現況と比較しよう。ミャンマーは含み、ネパール・ブータンは含まない。後の、パキスタンとバングラデシュの分離独立も重要。
- ③各国のアフリカ進出も地図で整理が必須。P. 257 は極めて重要。適当に覚えるのではなく、英仏の縦断政策・横断政策の対立→ファショダ事件以降妥協→英仏協商とドイツの対立(モロッコ事件)という流れをおさえながら、整理したい。イギリスのアフリカ進出が、いつも順調だったわけではない。スーダンではマフディー一派(P. 257 の用語解説)が長期にわたって激しく抵抗し、南アフリカ戦争中は中

国方面に割く余力がなく，義和団事件での派兵は日露が中心となった (P. 250 の
①)。